

教育県岡山って!?

県教育庁教育次長

池 永 亘



「教育県岡山」。このフレーズをこれまで何度耳にし、目にしたらどうか。そのたびに漠然と江戸時代に閑谷学校が岡山県内にできたからだろうと思ひ、何かの資料にもそのような記載されていた記憶もある。しかし、いつもなぜなのか、本当なのかといった疑問が頭の隅にあった。今年、この疑問に答えてくれる資料が作成された。県教育委員会が作成した『教育県岡山』の成り立ちとこれから新しい教育を岡山から」という10ページ足らずの資料だ。(詳しくは、県教育委員会ホームページをご覧ください。)

これによれば、教育県岡山の成り立ちは次のとおりだ。1670年、岡山藩主池田光政は、武士だけでなく、地域のリーダー達にも教育が必要と考え、最古の庶民のための公立学校である閑谷学校を設立し、約200年にわたり、庶民教育の向上に寄与した。この教育を重んじる気風から、江戸時代の岡山県内の寺子屋の数は全国第3位、私塾の数は全国第1位であり、明治時代に入っても小学校就学率は全国第2位であった。また、戦後も昭和30年代に実施された全国一斉学力調査で全国上位という結果だった。こうした客観的な事実がわかると納得できる。ここに至るまでには多くの先人たちの並々ならぬ努力があったことは言う

までもない。ところが、これまで連綿と引き継がれてきたところから、これまでに教育基盤がそうではなかったと明らかになったのが、平成19年、43年ぶりに実施された全国学力・学習状況調査の結果だ。それ以降、その原因はさまざま分析され、具体的な取組も実施されており、少しずつ改善の兆しを見せつつあるのが今の状況だ。

今後、岡山県教育に求められるものは、この「成り立ちとこれから」にもあるように、不易と流行の見極め、これまで受け継いできた教育県岡山の基盤の上に、時代の状況を踏まえ、将来を見据えた取組を推進することだ。

今後、さらに情報化社会は進展していくだろう。それは避けて通れないし、止めることもできない。当然、デジタル機器等を通してのやり取りも増えていく。しかし、どんなに時代は変わり、我々を取り巻く環境が変わろうとも、人間同士が関わり合いながら生きていくことは不変だ。デジタル機器の向こう側には必ず人がいることを意識し、一層相手の立場に立つて考え、行動しなくてはならない。当たり前のことだが、このことは、常に忘れないようにしようと思っている。